

# 西洋精神の起源をめぐる一考察

## — 映像に描かれた聖書・神話・伝説 —

岩 本 裕 子

### 要約

こども学部発足により始まった「歴史入門」の講義を手がかりに、西洋精神の起源に関する一考察を試みた。講義は筆者の専門領域である西洋史を中心に展開する。旧約聖書・ギリシャ神話・ケルト伝説という、史実と虚構の狭間に存在する西洋精神の起源から講義を始めることは意義深いばかりか、「歴史嫌い」の学生の興味を引くことにつながった。従来歴史嫌いの学生を歴史が大切だと自覚させるために、筆者の講義では映像や音楽を用いてきた。視覚や聴覚を刺激し学生の「気づき」を誘導できれば、歴史学習の必要性は明らかになる。

往年のハリウッドで『天地創造』や『十戒』が制作され、旧約聖書の世界が欧米社会に直結することは周知された。21世紀を迎えた現在も、『トロイ』『アレキサンダー』『キング・アーサー』等の西洋史の古典領域をテーマとする映画化は続いている。講義題材としてばかりでなく、ハリウッド映画を歴史学の視点で読み解く意義は深い。

**キーワード** 西洋史、ハリウッド映画、ヘブライズム、ヘレニズム、ケルト伝説

### 目次

1. はじめに
2. 旧約聖書から読み解くヘブライズム
  - 2.1 旧約聖書と兄弟宗教
  - 2.2 『天地創造』に見るハリウッドの意図
  - 2.3 『十戒』と『プリンス・オブ・エジプト』に見るモーセ像
3. ギリシャ神話から知る西洋：神々と共存するヘレニズム世界
  - 3.1 オリンポスの神々と西洋世界
  - 3.2 ギリシャ神話から知る西洋：映画『トロイ』『トロイのヘレン』『300』
  - 3.3 西洋と東洋の出会いから生まれたヘレニズム文化：映画『アレキサンダー』
4. ケルト民族の誇り、アーサー王伝説
  - 4.1 先住民としてのケルト民族
  - 4.2 説話『トリスタン物語』から楽劇『トリスタンとイゾルデ』まで
  - 4.3 円卓の騎士伝説と映画『キング・アーサー』
5. おわりに

## 1. はじめに

『浦和論叢』こども学部発足記念号への最初の拙稿テーマは、こども学部の一員として学生と関わる様々な場面のうち、筆者の専門領域にもっとも近い講義「歴史入門」(2007年度前期開講)にまつわるものとする。17年間勤務した短期大学部(短期大学)では英語科目以外に、1995年度以降から「アメリカ事情」(創設当初「英米事情」)「アメリカ研究」「比較文化」「異文化理解」といった講義科目を担当してきた。これらの講義基軸はアメリカ合衆国に置かれ、合衆国の視点から講義を展開してきた。

英語科目のようにテキストやプリントを演習形式で学習させるのとは異なり、講義科目の場合、教員側から一方的に講義するためには、専門的な知識以上にかんがりの講義「技術」を必要とした。自力でノートを取る形式に慣れていない本学学生に向かって、彼らの理解度を確認しながら講義を進めることで、他大学での非常勤<sup>[1]</sup>で行ってきた大学講義以上の「技術」を磨くことが出来た、と本学学生たちには感謝している。現在は当然のように行われている授業アンケートがまだ日本国内の大学では徹底していなかった1990年代から、筆者には学生の理解度が講義の最重要点であり続けた。1997年暮れに『スクリーンで旅するアメリカ』(以下『旅』と略記)、2003年秋に『スクリーンに投影されるアメリカ』(以下『投影』と略記)を出版し、テキストに使用したお陰で、学生が予習復習をする手段は増えた、と思っている。

18年間教壇で合衆国の歴史や文化を講義してきたことと比較して、本稿のテーマである「歴史入門」は、二つの点で筆者には新しい挑戦となった。まず、受講生が保育職を目指す学生で、英語を用いることやアメリカ合衆国のことを学習することに必然性を持っていない、と言う点だった<sup>[2]</sup>。つまり、歴史入門を受講することに対して「動機付け」(motivation 日本語ではモチベーションと表現)が薄い、ということである。そういう彼らに、歴史入門の興味深さや必要性を感じてもらうために、従来の私の講義方法である「映像と音楽を用いる」ことが効果的であることは講義開始前から予想がついた。前期で最初の学年を終了した現在、予想は確信に変わった。

講義終了時には「案外歴史も面白い」「映画を観るためには歴史は必要だ」「歴史を学ぶことが重要だ」といった感想を得られた。ただ、筆者としては新しい科目でもあり、特に講義シラバス前半に関しては、専門領域(アメリカ史)を越えているために準備にかんがりの時間を要した。ところが講義準備をした量の3割くらいしか講義では伝えられず、7割は積み残すこととなった。従来すべての科目においてこの現象はあったために、話せなかった7割を学生に伝えたいとの思いから活字化してテキストとして出版してきた経緯がある<sup>[3]</sup>。本稿はこうした試みにもつながるものである<sup>[4]</sup>。

付録【こども学部「歴史入門」2007年度前期講義シラバス】にあるように、講義後半はアメリカ大陸に渡っているために本講義のテキストとした『投影』で十分議論を終えている。本稿では、講義前半部分に関する「積み残し」部分を含めた議論を試み、講義ノートのままで教壇で触れることのできなかった部分(たとえば【本稿章別：関連映像・参考文献一覧】

のような情報)も整理したいと考えている。

## 2. 旧約聖書から読み解くヘブライズム

### 2.1 旧約聖書と兄弟宗教

2001年9月11日(以下「9月11日」)直後、世界の関心は事件の犯人グループが信仰したイスラム教に集中した。日本も例外ではなく書店にはイスラム教関連図書が平積みされた。イスラム教は、キリスト教及び仏教と共に世界三大宗教とされるが、その理由は信じようとする人々に対して広く門戸を開き、新たな信者を受け入れようとするからだった。他者を寄せ付けず排他的なヒンズー教やユダヤ教との大きな相違点であった。

排他的で選民思想とも言えるユダヤ教は、ヤハウェのみを唯一神と信じる宗教である。ユダヤ暦3761年(キリスト紀元始まりの年で、正確なキリスト誕生年ではない)に生まれた「神の子」イエスによって始められたキリスト教を兄弟宗教とした。ともに同じ「神」を信じた。さらに西暦(キリスト教暦)610年頃に唯一神であるアッラーの神の啓示を受けたムハンマド(Muhammad)によってイスラム教が開祖された。このようにして三つの宗教は兄弟宗教として同じ神を信じた。「骨肉相食む」関係にあることは、現在の中東情勢を見れば明らかである。

ユダヤ人の歴史が語られる旧約聖書は、キリスト教とイスラム教にとっての聖典であること以上に、ユダヤ(イスラエル)人にとっては唯一の正典である。古代ヘブライ語で書かれているため「ヘブライ語聖書」と呼ばれることもある。『新共同訳聖書』で1,500頁に及ぶ大部な書物で、紀元前1000年から200年頃までの間に書かれ、内容的にも様々な文書が収められている。旧約聖書は第1部「律法書」(トーラー)、第2部「預言者」(ネビイーム)と第3部の詩編や歴代誌を含む「諸書」(ケスビーム)で構成される<sup>[5]</sup>。

律法書の冒頭にあるのが「創世記」(Genesis)である。神が天地を創造し、イスラエル人がエジプトで生活するまでの物語が書かれている。その一部を映画化した作品『天地創造』は次節で検討する。ここでは、旧約聖書を題材にした拙稿を引用して本節の役目を終える。

【MOC NEWS, Nov. 2007 vol. 43 コラムテーマ「光」】拙稿「光あれ」<sup>[6]</sup>

ユダヤ教、キリスト教、イスラム教の3つの兄弟宗教に共通した信仰の対象である『旧約聖書』は創世記から始まる。6日間で天地を創造した神は、初日に闇から光を生み出した。「光あれ」の言葉とともに…。

1945年7月16日ニューメキシコ州アラモゴードの砂漠で、原子爆弾が爆発し人類最初のキノコ雲が上がった。ヒロシマ・ナガサキに先立つこと半月、合衆国の「マンハッタン計画」(原子爆弾製造計画)成功の瞬間である。その場で実験成功を目撃した物理学者の一人が「光あれ」の言葉を思い出した、と語った。

田口ランディ『被爆のマリア』の「イワガミ」の章に、被爆した死者の霊が「光」となって彼岸へ行くことが語られている。ピカッと光ってドンと爆発した原爆の被害者の霊は光

となって天に召させたのだろう。原爆投下を謝罪しない、と明言した物理学者の一人は“Remember Pearl Harbor”を口にした。ハワイ時間12月7日朝まであと1ヶ月、「光」の意味を考え続けたい。

## 2.2 『天地創造』に見るハリウッドの意図

1966年制作のハリウッド映画『天地創造』は、原題を“THE BIBLE”としている。当初は旧約聖書すべての映画化を目指したようだが、結果は創世記22章までの映画化に留まった。原題に続く言葉として“... in the beginning”とあるのはそのためだろう。兄弟宗教の信者でなくとも教養として、様々な場面で聞くことの多いエピソード10項目が描かれている。以下に列挙し、講義で触れる教養程度のコメントを加えておく。

- |                        |              |
|------------------------|--------------|
| 1. 天地創造                | 6. バベルの塔     |
| 2. アダムとイブ（人類の誕生）       | 7. アブラハムの放浪  |
| 3. カインの殺人              | 8. ソドムとゴモラ   |
| 4. ノアの方舟 <sup>はこ</sup> | 9. イサクの誕生    |
| 5. オリーブと鳩              | 10. アブラハムの苦悩 |

前述の「光あれ」で始まった神による5日間の天地創造、6日目に野生動物から家畜まで、あらゆる地上の動物をつくり、最後に神の姿に似せて「アダム」をつくった。「イブ」誕生の経緯に関して「歴史入門」受講生では知らない学生の方が多かったことは筆者には驚きだった。本学では「聖書研究会」サークルの顧問を長く務めさせてもらっている。サークル勉強会において例年「天地創造」の説明から始めるが、イブと蛇のやりとりに関しては部員たちの興味をそそるテーマとなっている。旧約聖書の聖典としてではなく、「物語」としての醍醐味の部分でもあるのだろう。

7日目に天地創造を終えたことを祝して「安息日」とした。7日目を休日にすることから「7」という数字は休みを連想させる。欧米の大学での習慣に影響されて日本でも大半の大学で、勤務7年目の教員には「サバティカル・イヤー」(sabbatical year : 1年間の研究有給休暇)が与えられているのはこのためである。

原罪(original sin)のためにエデンの園から追放されたアダムとイブの間に生まれた長男カインは次男アベルを殺害した。人類最初の殺人だった。以降悪がはびこり続ける地上を見て「人」を作ったことを後悔した神は、悔い改めない人間に対する神罰として「ノアの方舟」という試練を与えた。列挙一覧ではフリガナをつけたが、この表記を「箱船」ではなく「方舟」としたことにに関して字幕翻訳者である清水俊二氏は1976年に次のように書いている。「聖書の日本語訳にはむずかしい字やわかりにくいいいまわしが、かなり使っているので、これをできるだけ当用漢字と分かりやすい言葉に置きかえて、読みやすい字幕を作ることにつとめた。箱船は方舟とした」と<sup>[7]</sup>。

「バベルの塔」に関しては、「歴史入門」開講時に映画『バベル』(Babel : 2007)が公開されたこともあって、受講生の関心を大いに引いた。「人々は天にも届く程の煉瓦の高い塔を

建設しようとした。神を無視した人々の傲慢さが神の怒りを買って、人々が使っていた言葉は変えられ、互いに意志が通じなくなり混乱（バベル）を生じ、この街はバベルと呼ばれるようになった」という説明で学習し、映画『天地創造』の「バベルの塔」場面で確認した。『天地創造』がDVD化されたお陰で視覚教材として旧約聖書が教室で蘇っている。

聖書の天地創造説に反する理論を公立学校で教えることを禁じていたアメリカ南部テネシー州で、進化論を教えて裁判にかけられた高校教師が有罪になったのは、1925年だった。プロテスタント教会内のこうした保守的な神学運動をファンダメンタリズム（Fundamentalism）と呼び、現在でも保守的福音主義として多くの信奉者をかかえている。

### 2.3 『十戒』と『プリンス・オブ・エジプト』に見るモーセ像

「歴史入門」の本論初回となる第2章講義題目を「旧約聖書から読み解く中東和平：映画『プリンス・オブ・エジプト』」としているのも、旧約聖書「出エジプト」から始めて中東和平の現状を認識させたい、と考えたためだった。「ゆとり教育」第一期生にあたることも学部1年生には「聖書」そのものの説明から始める必要があり、中東和平まで講義を発展させることはできなかった。聖書が三つの兄弟宗教の聖典であることは徹底して説明するが、こども学部の学生には、ユダヤ教とイスラム教より身近になるはずのキリスト教に関する説明は大変熱心に聞き、ノートも取れたようだった。

彼らの就職先となるであろう幼稚園や保育所がキリスト教系である可能性は非常に高いことを説明すると、日常生活では無縁であったはずの宗教問題も自分の問題となることを実感したようだった。キリスト教といっても一枚岩ではなく、カトリック、プロテスタント、（ロシアあるいはギリシャ）正教、アングリカン（英国国教会）と大きな宗派ごとに歴史を知り、祝祭日などに関連した知識が必要であることを説明した。キリスト教系の幼稚園で開催される宗教行事への歴史理解の重要性、祭事の細かな意味を理解し幼児に説明できる能力をつけることの必要性、といった観点から説明を始めると、殊の外学生たちは熱心に聞いた。

こうして知的好奇心のアンテナを張ることを覚えた学生に向かって旧約聖書に描かれている「出エジプト」を講義するために有効だったのは、アニメ『プリンス・オブ・エジプト』（以下『プリンス』と略記）（The Prince of Egypt : 1998）だった。まず、アカデミー主題歌賞を受賞したテーマ曲♪When You Believeを「見せる」ことから始めた。ホイットニー・ヒューストンとマライヤ・キャリーという二人の黒人女性人気歌手のデュエットで話題になった。1999年3月の第71回アカデミー賞授賞式のこの二人のデュエットを見せたのだった。

ユダヤ系（アメリカ人）のための映画で（アメリカ）黒人が主題歌を歌う意味は深い。アメリカ社会において共に差別の対象となった両グループは、公民権運動の時期に共闘した経験がある。両者の融合団体である、1909年創設の全国黒人地位向上協会（National Association for Advancement of Colored People : NAACP）はその好例だろう。『プリンス』制作に関わったユダヤ系アメリカ人であるスピルバーグ監督も、奴隷船アミスタッド号の反乱を描いた『アミスタッド』（Amistad : 1997）や、黒人女性作家アリス・ウォーカーの

ピューリッツァー賞受賞小説の映画化『カラー・パープル』(Color Purple : 1985) を監督して、黒人社会の歴史や現実を世に問いかけた。ユダヤ系と黒人のつながりは、ハリウッドでも深いと言えるだろう。

「主題歌を見る」ことに次いで、映像として選択したのはアニメ版ではなくハリウッド映画を代表する大作『十戒』(The Ten Commandments : 1956) の紅海が割れる場面だった。セシル・B・デミル監督がすでに無声映画時代の1923年に『十誡』(The Ten Commandments : 1923) として制作していたが、33年後にハリウッド映画史上に輝く壮大なスペクタクル史劇としてリメイクしたのだった。アカデミー特殊効果賞を受賞した紅海の場面を見せた。CGが当たり前の世代にとっても、半世紀前のハリウッド技術を体感したようだった。講義のテキストから『十戒』に関する言及部分を加筆修正しながら引用しておきたい<sup>[8]</sup>。

ユダヤ教徒の春最大の祝祭は「過ぎ越しの祭」である。英語ではPASSOVER、イスラエル語では「ペサッハ」と呼ぶ。紀元前1280年頃、エジプトの奴隷だったユダヤ人の祖先60万人が、モーセに導かれ、約束の地カナンをめざして脱出したこと、いわゆる旧約聖書出エジプト記にある「出エジプト」を記念する祭である。「出エジプト」の中でも、最も有名な場面は紅海が裂けて陸となり、モーセに率いられたユダヤ人たちが、追ってくるエジプト軍から逃れてそこを渡る場面だろう。

映画『十戒』でこのハイライトシーンを見ることができる。セシル・B・デミル監督による1956年製作の大作である。主演のモーセ役は、チャールトン・ヘストンが演じた。日本にも進出したハリウッドのユニバーサル・スタジオでは、1970年代頃にはこの紅海のセットが目玉であった。スクリーンで見る壮大さからは考えられないほどのセットのあまりの小ささに驚くと共に、逆に特撮技術のすばらしさを実感したものである。今ではジュラシック・パークにお株を取られてこのセットはなくなっている。

アニメーションになった紅海シーンを『プリンス・オブ・エジプト』でも堪能することができる。ユダヤ系監督であるスティーブン・スピルバーグ率いる製作会社ドリームワークスが、四年の歳月をかけて手掛けた大作である。アニメ史上初のクレーン・ショットを用いた馬車の疾走場面、さらに紅海の場面である。臨場感あふれる迫力映像が圧巻で、アニメの可能性を実感することができる。『十戒』では紅海を渡って以降のシナイ山での「十戒」を受ける場面こそ重要だが、『プリンス』では紅海をラスト・シーンとしている。ユダヤ系で構成されるドリームワークス・チームは、ユダヤ民族の誇りである「出エジプト」という史実、さらにユダヤ人のヒーロー中のヒーローであるモーセの存在を、幼い子供たちに伝えたかったのだろう。

### 3. ギリシャ神話から知る西洋：神々と共存するヘレニズム世界

#### 3.1 オリンポスの神々と西洋世界

「光あれ」と始まった聖書の世界の天地創造に相当するギリシャ神話における「この世」

の始まりは、母なるガイア（Gaia：大地）と父なるウラノス（Uranos：天）とされる。この両者はカオス（Chaos：虚空）から生まれた神々の二者であった。神々の系譜は次のようになる<sup>[9]</sup>。

①カオスから生まれた神々

→ガイア／タルタロス（冥界の最深部）／エロス（原初の力）

→ウラノス／高い山々／ポントス（荒海）

②ガイアとウラノスから生まれた神々

→ティタン神族

→オリンポスの神々

ギリシャの神々一覧表（＊オリンポス12神）

ギリシャ名		ラテン名（ローマ神話）		英語名	
クロノス	Kronos	サトゥルヌス	Saturnus	サタン	Saturn
＊ゼウス	Zeus	ユピテル	Jupiter	ジュピター	Jupiter
＊ヘラ	Hera	ユノ	Juno	ジュノー	Juno
＊ポセイドン	Poseidon	ネプトゥヌス	Neptunus	ネプテューン	Neptune
＊デメテル	Demeter	ケレス	Ceres	セリーズ	Ceres
ペルセポネ	Persephone	プロセルピナ	Proserpina	パーセファニ	Persephone
＊アポロン	Apollon	アポロ	Apollo	アポロ	Apollo
＊アルテミス	Artemis	ディアナ	Diana	ダイアナ	Diana
＊アレス	Ares	マルス	Mars	マーズ	Mars
＊アプロディテ	Aphrodite	ウェヌス	Venus	ヴィーナス	Venus
エロス	Eros	クビド アモル	Cupido Amor	キューピッド	Cupid
＊ヘルメス	Hermes	メルクリウス	Mercurius	マーキュリー	Mercury
＊アテナ	Athena	ミネルヴァ	Minerva	ミネルヴァ	Minerva
ニケ	Nike	ウィクトリア	Victoria	ナイキ	Nike
＊ヘパイストス	Hephaistos	ウルカヌス	Vulcanus	ヴァルカン	Vulcan
＊ヘステイア	Hestia	ウェスタ	Vesta	ヴェスタ	Vesta
＊ディオニソス	Dionysos	リベル	Liber	ダイアナイサス	Dionysus
バッコス	Bakchos	バックス	Bacchus	バッカス	Bacchus
ハデス	Hades	プルト	Pluto	プルートー	Pluto
アスクレピオス	Asklepios	アエスクラピウス	Aesculapius	エスキュレイピウス	Aesculapius
ギガス	Gigas	ギガス	Gigas	ジャイアント	Giant

ギリシャの英雄たち

ギリシャ名		ラテン名		英語名	
ヘラクレス	Herakles	ヘルクレス	Hercules	ハーキュリーズ	Herculas
アキレウス	Achilleus	アキレス	Achilles	アキリーズ	Achilles
オデッセウス	Odysseus	ウリクセス or ウリッセス	Ulixes Ulysses	オディシユーズ or ユリシユーズ	Odysseus Ulysses
アイアス	Aias	アイアクス	Ajax	エイジャクス	Ajax
イアソン	Iason	イアソン	Iason	ジェイソン	Jason
ヘレネ	Helene	ヘレナ	Helena	ヘレン	Helen

ギリシャ神話が文学的記録として残っているもっとも古いものは、ギリシャ最古の詩人ホメロス（英語名 Homer : B.C. 9-8C）の叙事詩『イリアス』『オデュッセイア』にさかのぼる。少し遅れて詩人ヘシオドスの『労働と日々』『神統記（テオゴニア）』に神々の系譜が語られてきたとされる、ギリシャの神々のこと、まさに「神話」は西洋世界の母胎であり、西洋理解に欠かすことのできない重要な視点である<sup>[10]</sup>。

「カオス」から次々新しい神が生まれ、やがてゼウス（Zeus, Jupiter）を中心とするオリンポスの神々へと展開されていく。前頁の一覧表で\*印を入れたオリンポス12神（以下本文にてナンバリングをして確認する）とは、クロノス（Kronos, Saturn→土星）を中心とするティタン神族との戦いに勝利を収めた後、ギリシャ最強のデュポンを倒し巨人族ギガスたちをうち破って自分たちの権威を揺るぎないものにした。

次節ではこれらの神々が登場してギリシャ史を形作る過程に言及するため、ここでは12神のなかでも「歴史入門」で講義するまさに教養程度の神々について触れておきたい。自分の子どもを食べ尽くそうとしたクロノスから末っ子ゼウスは命を逃れ、親子決戦となった。①ゼウスの兄姉に②ヘスティア（炉の女神←12神に数えられない場合もあり）③デメテル（穀物の女神）④ポセイドン（Poseidon 海の神, Neptune）そして妻となる⑤ヘラ（Hera, Juno）がいた。ヘラの嫉妬に動じることなく、ギリシャ最高神となったゼウスは、多くの女性と交じり合い、数え切れない程の神々や英雄、美女を生み出した<sup>[11]</sup>。次節で扱う映画『トロイ』はこの一つの例が事の発端となるため、さらに神々の説明を補足する。

ここではゼウスの子どもの中で、12神に限定して説明を加える。ティタン神族の娘の一人レトとの間にできた双子が⑥兄アポロン（Apollon, Apollo 弓と予言の神）と⑦妹アルテミス（Artemis, Diana 狩猟の女神）だった。もう一人ティタン神族の娘マイアから生まれたのは神の使者⑧ヘルメス（Hermes, Mercury）である。葡萄栽培と酒の神として知られる⑨ディオニソス（Dionysos←12神に数えられない場合もあり, Bacchus）はテュロスの王族の娘セメレの子だった。いわゆる本妻以外の女性から生まれた子ども達で12神となった神は以上である。但し、②と⑨は12神に含まれない場合もある。ヘラの前にゼウスの最初の妻だったメディスから生まれたのが⑩知恵と戦いの女神アテナ（Athena, Minerva）だった。「本妻」ヘラから生まれた子ども4人のうち2人、⑪ヘパイストス（Hephaistos 鍛冶の神, Vulcan）と⑫アレス（Ares 戦いの神, Mars）を加えて、オリンポス12神と定めている。

含まれない②と⑨の2神の代わりに確実にあと一人重要な神がいる。次節でも登場するが、愛の女神アプロディテ（Aphrodite, Venus）を欠かすことはできない。英語名での「ヴィーナスの誕生」は、ボッティチェリを初めとする西洋絵画に不可欠なテーマとなっている。彼女の誕生には、ギリシャ神話の祖である2人の詩人による2説があるとされている。ホメロスは彼女をゼウスとディオネの娘としたが、一般的にはもう1説のヘシオドス説がとられている。愛、美、豊饒、多産の女神とされるアプロディテには魅力的とされたのだろう。その説とは、ゼウスの父であるクロノスは、自らの父親である天空神ウラノスの男根を切り落として海に投げ入れたが、その精液から生まれたのがヴィーナスである、という説だった。

「歴史入門」で講義した内容で、受講生の興味を引いたもう一つのことを本節最後に加えたい。ヴィーナスに代表されるギリシャの神々の名前は、太陽系惑星の名前（英語名）と関係していた。以下がその一覧であるが、日本漫画『セーラームーン』で育った受講生たちには親近感を持って学習できたようだった。筆者としては太陽系惑星から冥王星（Pluto）が外されたニュースがらみで紹介したつもりだったが、思わぬ方向に講義は進んだ。「講義は生き物」を実感する瞬間でもあった。ちなみに、冥王星の英語名プルートーは、ディズニー・アニメのキャラクターで、ミッキー・マウスが飼っている犬の名前でもあるため、受講生の関心はさらに広がっていったようである。

- |     |         |          |      |         |         |
|-----|---------|----------|------|---------|---------|
| ①水星 | Mercury | ← ヘルメス   | ⑤木星  | Jupiter | ← ゼウス   |
| ②金星 | Venus   | ← アプロディテ | ⑥土星  | Saturn  | ← クロノス  |
| ③地球 | Earth   | ← ×      | ⑦天王星 | Uranus  | ← ウラノス  |
| ④火星 | Mars    | ← アレス    | ⑧海王星 | Neptune | ← ポセイドン |

ギリシャ神話から発展させた次節の映画が受講生の興味を引き、想像以上の講義の展開になっていった。西洋精神の起源であるギリシャ神話は、こども学部学生にとって忘れられない教養となったようである。

### 3.2 ギリシャ神話から知る西洋：映画『トロイ』『トロイのヘレン』『300』

古代ギリシャのポリス社会を舞台とし、ギリシャ神話を題材にしたハリウッド映画は少ない。なかでもトロイア戦争、特に「ヘレン」は格好のテーマであり続けるらしい。

半世紀以上前にハリウッドで制作された『トロイのヘレン』（Helen of Troy : 1955）は、「ホメロスの一大叙事詩『イリアス』の中のトロイ戦争に材を得たスペクタクル・ロマン。敵対する国の男女の悲恋物語にスポットを当て、壮大なスケールで描き出す」<sup>[12]</sup>と説明されている。果たして「悲恋」なのかどうか。

紀元前12～13世紀頃に実際に戦争はあったようだが、戦争という史実より物語の部分が大きくて、伝説的戦争と言った方が正確かもしれない。前述の映画紹介通り、ホメロスの詩『イリアス』で描かれたものだった。スパルタ王妃ヘレネ（英語名ヘレンのため以下ヘレンと称す）とスパルタを訪問中だったトロイアの王子パリスが恋に落ち、パリスがエーゲ海を越えて本国に戻るときに、彼女を連れ帰ってしまったのだった。王妃奪還を理由にギリシャ軍は、ヘレンの夫であるスパルタ王メネラオスの兄で、ミュケナイ王アガメムノンを総大将にトロイアへ乗り込んでくるのだった。10年間に及ぶ攻防の末、巨大な木馬に兵を潜ませるという奇計によって、最後にはトロイアを破壊したのだった。

この話の基盤になる数々の登場人物が、ギリシャの神々と接触して話が展開されるために史実とは言い難いとされる。まずパリスが虜になるヘレンだが、父親を神とする女性である。スパルタ王テュンダレオスの妻レダに恋をしたゼウスが白鳥に姿を変えて、レダと交わり生まれたのがヘレンだった。つまりギリシャ随一の美女ヘレンは大神ゼウスの娘ということになる。ヘレンの母レダを描いた絵画としてはレオナルド・ダ・ヴィンチの素描「レダと

白鳥」が有名だろう。ゼウスの恋愛遍歴の中でも最も知られた話かもしれない。

実はヘレンは双子で生まれ、もう一人のゼウスの娘クリュタイムネストラは成人してアガ멤ノンに嫁いだ。トロイア遠征軍総指揮官であった夫不在中に、夫の従弟と恋仲になったクリュタイムネストラは、凱旋したアガ멤ノンを殺害するのだった。二人の間に生まれた娘エレクトラは、父を殺した母と義父を憎んで復讐を誓うのだった。心理学で言う「エレクトラ・コンプレックス」の由来である。

トロイア戦争の原因となったパリスの恋心は彼の罪ではなかった。すでに神々によって決められたことだったのである。ギリシャ神話の英雄の一人ペレウスは女神テティスを射止めて結婚にたどり着いた。二人の婚礼では盛大な宴会が開かれて、多くのオリンポスの神々が集まった。ところが唯一招待されなかったのが、争いの女神エリスだった。恨んだエリスは、宴たけなわの頃にやってきて「最も美しい女性に」と書いた黄金のリンゴ<sup>[13]</sup>を投げ入れた。

女神たちはこの黄金のリンゴを奪い合ったが、最終的に残ったのはヘラとアテナとアプロディテの3人だった。トロイア戦争の原因は実はこの黄金のリンゴだった。最終決定を出すべきゼウスは、八方美人のため結論を出せず、審判の役目をトロイアの弓の名手であり、ギリシャ当代きっての美男とされたパリス王子に押しつけたのだった。かくして三女神はゼウスの使者ヘルメスに案内されてトロイアの山で羊飼いをするパリスの元へ向かった。三女神は、パリスの気を引くためにそれぞれ条件を提示した。

結婚と出産の女神であり、オリンポスの女主人でゼウスの妻ヘラ（ジュノー）は、パリスを「アジア全土の王」にすると申し出た。パルテノン神殿の女主人で知恵と戦いの女神アテナ（ミネルヴァ）は「絶対負けることのない戦士」になることを条件にした。最後のアプロディテは、海から生まれた愛の女神らしく「ギリシャで最も美しい女性」を妻にすることを約束した。パリスはアプロディテの条件を受け入れたので、ギリシャ随一の美女ヘレンと出会うとそのまま恋に落ちたのだった。

トロイア戦争に登場するもう一人の主役は、アキレウスだろう。2004年にハリウッド映画化された『トロイ』（Troy : 2004）においてはパリスやヘレンよりも、ブラッド・ピット扮するアキレウスに注目が集まったようだった。黄金のリンゴが投げ入れられた祝宴は、英雄ペレウスと女神テティスの婚礼を祝ったもので、この二人の間に生まれたのがアキレウスだった。ラテン語でアキレスと呼び、日本でも靴会社の名前となったためにこの呼び名の方がなじみがあるだろう。このアキレスを産んだ女神は、英雄といえども人間の父を持つ我が息子の不死を願って、冥界へ流れるステュクス河の水に浸して不死身の身体を作ろうとした。ところが、アキレスのかかとの部分をつかんだまま河に浸したためその部分是不死にはならず、息子の唯一の弱点となった。アキレス腱の由来であることは誰もが知ることだろう。映画のなかでも、ギリシャ側から参戦したアキレスのかかとをトロイアのパリスが弓で射て命を絶たれる場面はクライマックスとなっていた。

登場人物ばかりか、トロイア戦争自体が10年間も続いた理由の一つはオリンポスの神々が二手に分かれてそれぞれに味方したために、長引いたのだった。トロイア側にアプロディテ

がつくというのは、前述の絡みから当然だろうが、他の神々ではアポロン、アルテミス、レット、アレスらがトロイアに味方した。ギリシャ側には、当然ヘラとアテナがついたわけだが、加えてポセイドン、ヘルメス、ヘパイストスが味方した（神々一覧表\*印参照）。神々のリーダーでありながら、ゼウスは生来の日和見主義で、ヘレン誕生の経緯を考えてもいわば「諸悪の根源」であったゼウスは、様々な女神の願いに応じながら、ギリシャ側とトロイア側を転々とした。こうした神々の関与のためにトロイア戦争は長引いたとされる。

偶然ながらこの講義週に、朝日新聞土曜夕刊で毎週連載している「検定：腕試し」で以下のような問題が出されていた<sup>[14]</sup>ので、翌週には教材とした。問題では正解は3題からの選択になっていたが、ここでは省略する。

古代ギリシャでは、紀元前800年ごろからポリスの建設が始まった。これらのポリスのうち、アテネでは民主政治が発達し、( ① )では軍国主義や鎖国主義を特色とした。紀元前5世紀に起こった ②「ペルシャ戦争」では、諸ポリスが結束し、ペルシャ軍の対立が深まり、同世紀後半にはペロポネソス戦争が勃発した。

Q1. ①にあてはまるポリスの名称は？

Q2. ②で、紀元前490年にアテネの重装歩兵部隊がペルシャ軍を破った戦いは？

以上の「腕試しクイズ」ばかりかもう一つ「偶然の一致」が起こった。講義は水曜日だが、2日後の金曜日に地上波TVで『トロイ』が吹き替えながら放映されたのだった。受講生には大いに刺激になったようで、翌週に確かめると受講生（35名）の半数以上がTVで見た、あるいはビデオ収録後に見た、と答えてくれた。決して歴史好きばかりが受講したわけではないはずの講義「歴史入門」において、聖書から神話まで学習した学生たちが興味を膨らませて歴史学への「まなざし」をこういう形で表してくれたことに感謝した瞬間だった。

註[2] 同様、こども学部という筆者には研究領域としては畑違いの学生に向けて講義することの意義を実感できた貴重な経験となった。この側面からも、「歴史入門」という講義を「聖書・神話・伝説」という、歴史研究者から見れば「許し難い」領域に踏み込んだことが許されるのではないかと思い始めている。

『トロイ』同様、ポリス社会スパルタ（腕試しQ1の正解）を舞台にした映画『300』（Three Hundred：2007）が公開された。「弱い者は生きることさえ許されない、そんな厳しい掟のもとに生まれたスパルタの男たち。次々と国を征服していくペルシャ帝国が次なる標的に選んだのは、彼らの住むギリシャの地だった。100万の大軍を目の前にしてもひるむことのないスパルタ精鋭の300人。史上空前のこの戦いの結末は？」<sup>[15]</sup>との内容紹介がある。

紀元前480年のテルモピュライの戦いを描いたアクション映画で、原作は「コミック界では有名なフランク・ミラーのグラフィック・ノベル」である。中俣真知子氏の解説<sup>[16]</sup>によれば「ペルシャの血を受け継ぐイランの人々は、本作が歴史を歪曲しイラン文化を侮辱していると怒りの声を上げているらしい」として、ハリウッド映画にありがちな「悪」のデフォル

メを認めた批評をしている。戦闘物であるために暴力的な描写に対しても「スローモーションの多用やCG合成による劇画の趣が一種のクッションとなってリアルさを和らげ」と好意的に受け止められている。「史実にどれだけ即しているかは定かでない」としながらも、CG映像に対して、絶賛評をしていることに違和感を持たずにいられない。

「史実」として加えておきたいのは、古代マケドニア社会はギリシャと同じく「男性同士の同性愛によって成り立っていた」ということである。「兵士たちに明日をも知れぬ戦闘の連続や、厳しい陣中生活を乗り切るための精神的な糧を与えた。戦時・平時を問わず、彼らの間に友愛を育み、競争意識を育て、恐怖心を克服し、お互いの名誉と勇気を高めさせた。…哲学者プラトンの対話篇には、ソクラテス自身や周囲の人々の愛人関係がしばしば活写されている。不敗を誇ったテーベの神聖部隊300人は、恋人同士を組み合わせで編制され、そのことが二人して死地に赴くだけの高揚感をもたらした」<sup>[17]</sup>とされている。映画『300』の歴史的な裏付けである。この歴史的事実は、次節のアレキサンドロスに続いていく。

### 3.3 西洋と東洋の出会いから生まれたヘレニズム文化：映画『アレキサンダー』

本節では、論文形式を変えて、講義メモを書き出してみたい。前節の『トロイ』が講義週に地上波TVで吹き替えながら放映されたことには触れたが、講義の最初に受講生の興味を引く導入は重要である。出欠確認のために毎回行う複数の質問はこうだった。

「韋駄天って聞いたことある?」「イस्कンダーって何だろう?」講義が終わる頃には、何かの映像を通して、最初の問いかけに答えが得られることをすでに体験している受講生たちは、胸を踊らせ始めた。「足の速い人の事じゃない?」「イस्कンダルは宇宙戦艦大和だったねえ」と口々に言い合っては、講義開始に耳を澄ませ始めた。この講義のために準備したのが、以下の講義ノートである。

【Alexandros (B.C. 356, July-323, June 10)】

- ①各国語表記は以下。Alexandros (ギ) – Alexandre (仏) – Alexander (英・独)
- ②アレクサンドロス (三世) 大王。マケドニアフィリッポス二世の息子。20歳で即位。ギリシャを支配し、ペルシア王ダレイオス三世の軍を破り、シリア・エジプト・ペルシャを征服、さらにインドに攻め入ってバビロンに凱旋、翌年没。王によってギリシャ文化は遙か東方に伝播 (でんぱ)。
- ③熱病のため死去した後、ロクサスが男児を産み、アレクサンドロス四世として即位。B.C. 310頃、カッサンドロスが母子を殺害し、マケドニア王家は断絶する。
- ④母親オリンピアスは自らをアキレスの末裔だと信じ、アレクサンドロスは神デイオニソス (ギリシャ神話の酒神バッカス。ゼウスとセメレとの子とされる。元々マケドニアの宗教的狂乱の儀式を伴う神がギリシャに輸入された)、あるいはゼウスとの間に出来た子だと思っている。母親が忌み嫌った片目のフィリッポスは、

こんな妻に向かって自らを「ヘラクレスの子孫」だと言い放った。

⑤アレクサンドロスの帝国を分割してエジプトを治めたプトレマイオスは、アレクサンドロスがアポロン神に守られていた、と述懐した。

⑥プロメテウス（ギリシャ神話のチタン族の英雄。天上の火を人間に与えてゼウスの怒りを買ひ、コーカサス山につながれたが、ヘラクレスに助けられた）

【韋駄天（いだてん）】

バラモン教の神で、シヴァ神の子とされる。仏教に入って仏法の守護神となり、増長天の八將軍の一つ。伽藍を守る神。小児の病魔を除く神。よく走る神として知られるため、「足の速い人」の意味となる。

【イスカンダー】

アレクサンドロスのアラビア語形がイスカンダー。これを中国語で表記したものがさらに変形して出来たのが「韋駄天」だという。

#### 【西洋古代世界：概観年表】

ヨーロッパ	オリエント・西アジア
B.C. 3000 エーゲ文明	エジプトでは王（ファラオ）による 統一国家（メソポタミアより早く） ピラミッド建設
B.C. 2000 クレタ文明	
B.C. 1500 遊牧民ヘブライ人、パレスチナに定住その一部はエジプトへ	
B.C. 13世紀 モーセの出エジプト	
B.C. 800 ギリシャでポリス独立	
B.C. 500-449	←ペルシャ戦争→
B.C. 356 アレクサンドロス大王誕生	アケメネス朝ペルシャ滅亡 ←大王東征（334-324）によるヘレニズム文化
B.C. 323 アレクサンドロス大王死去	セレウコス朝、プトレマイオス朝分立 (B.C. 30滅亡)
B.C. 31 ローマの地中海域統一	
B.C. (Before Christ)	
A.D. (Anno Domini)	
30頃 キリスト十字架刑	

## 【ヘレニズム世界覚え書き】

## 【B.C. 4世紀頃の中東地帯】

Before Christ ←→ Anno Domini

近東 ←→ 中東 ←→ 極東

EUROPE

MACEDONIA

PERSIA

GREEK

★ BABYLON

INDIA

EGYPT ★ ALEXANDRIA

→ 古代エジプトの首都。ヘレニズム文化と地中海貿易の中心地

→ ナイル川デルタの北西端、地中海に臨む都市

→ 大王の元で同名の18都市が建設された。

→ ヘレニズム時代：大王の治世～ローマによる東地中海制服

→ 大王死後、プトレマイオス朝エジプトの女王クレオパトラ7世自殺によってローマの地中海統一が成ったB.C. 30年に終わる

## 【ヘレニズム世界：Hellenism】

## ①ヘブライズムと対比して、ギリシャ精神

→ Hebraismヘブライ人の思想・文化、ユダヤ・キリスト教の思想の基

## ②東方文化を融合して普遍的性格を持つようになったギリシャ文明

## 【アレクサンドロス死去後のヘレニズム世界】

マケドニア・トラキア

リュシマコス王

アンティゴノス王

カッサンドロス王

デメトリオス王

セレウコス王・シリア

プトレマイオス王・エジプト

→ エジプト王はアモン神の化身、蛇はアモンの象徴

講義で用いた映像は、映画『アレキサンダー』の導入部分の5分程度だった。アレクサンドロスの病死を受けて、ヘレニズム世界を分割した一人、エジプトのプトレマイオス王が、アレクサンドロス大王の名前に由来する都アレキサンドリアで、大王の偉業を口述筆記する場面だった。学生たちの興味は、ポンペイ遺跡から出土されたモザイク壁画に描かれたペルシャ軍との戦闘場面を描いたアレクサンドロス大王の写真（右）を見せることで、東西世界の交流に努め、ヘレニズム世界を作った若き大王へと広がっていった。



ナポリ国立考古学博物館にて 2003年筆者撮影

## 4. ケルト民族の誇り、アーサー王伝説

### 4.1 先住民としてのケルト民族

先住民として周知された存在としては、南北アメリカ大陸にいる先住民が有名だろう。英語では「インディアン」西語で「インディオ」と呼ばれる人々である。南半球ではオーストラリアのアボリジニ (aborigine) と隣国ニュージーランドのマオリ族 (Maori) <sup>[18]</sup> がいて、日本では北にアイヌと蝦夷、南に沖縄の人々がいる <sup>[19]</sup>。

ヨーロッパにおける先住民という場合、その一つにケルト民族をあげることができる。5世紀頃までアルプス以北のヨーロッパの大部分とバルカンまで広く居住した民族だったが、ローマの支配下に入り、さらにゲルマン民族の圧迫によって次第に衰退して、現在アイルランド・スコットランド・ウェールズに加えて、フランスのブルターニュなどに散在している。現在のアイルランド地域に住むケルト民族はよく知られているが、北フランスのケルト民族のことは日本では周知されていないかも知れない。以下はその研究の集大成とも言え、大いに示唆に富む。原聖『ケルトの水脈』興亡の世界史第7巻（講談社、2007年）

原氏によれば、ケルトが体现するのは「ローマ文明やキリスト教が押しつぶしたような野蛮な、雑然とした、書きことばをもたないとされていた文化」だという。「よくわからない『幻の民』」「古代において栄華を誇った民族が、歴史の荒波に翻弄されつつも、忍耐強く生き延び、現在にまで存続しつづけているという認識」<sup>[20]</sup>と説明している。「ケルト人、ケルト文化とは何か」について原氏はさらに次のような解説を加える。

「言語的共通性」を前提として、カエサル時代にガリア（現在のフランス）を中心とした呼称でケルト人は存在した。カエサルの『ガリア戦記』（Commentarii de Bello Gallico）は、紀元前58年以降数年間、ガリアから英仏海峡を越えブリタニアまでをローマの版図に加えた遠征に関する詳細な覚え書きで、当時のガリアとゲルマニアを知る貴重な史料である。ガリア人に関しては触れられることはあっても、ケルト人という呼称は中世後期まで忘れ去られたという。ケルト人は「16世紀以降、自らの民族的出自として、また文化的アイデンティティの表現」として再び復活するのだった。

ブルターニュ地方のケルト民族研究書である原氏の書物の意図は「ケルトブームの延長上にある西欧文明批判としてのケルト文化の復興を再評価」することを目的とはせず、「歴史的文脈のなかに再度戻してみて、その中での同時代的意味合いを再考」することを目指した研究である <sup>[21]</sup>。エンヤやケルティック・ウーマンといった歌手によって馴染まれ日本でもブームになった「癒しのケルト」ではない、手堅い研究書である。

前述した地球レベルの先住民に共通する点は、自然信仰をすることだろう。ケルト民族も同様で、キリスト教徒から「異教徒」とされたケルト信仰のわかりやすい例を一つ挙げておきたい。樫の木に寄生するヤドリギは、稀なる存在として古代ケルト人においては神聖視された <sup>[22]</sup>。ヤドリギの魔力を期待して玄関に掲げる習慣が、近代になってキリスト教に取り込まれて、クリスマス・リースにつながっていく。他にも妖精、妖怪、鬼、魔女といった伝

説もケルト民族の特徴だと言えるだろう。

#### 4.2 説話『トリスタン物語』から楽劇『トリスタンとイゾルデ』まで

『トリスタン物語』はケルト伝説の説話にさかのぼるヨーロッパ中世の代表的な愛の物語で、流布本と騎士道本の二通りがある。流布本は、12世紀末のイギリス詩人トマ（Thomas d'Angleterre）による。騎士道本はドイツ中世の宮廷叙事詩人、ゴットフリート・フォン・シュトラースブルク（Gottfried von Strassburg : 1170-1210）の『トリスタンとイゾルデ』で、男女の清い愛と宮廷社会の秩序・倫理観との相克が主題となっている。

後者の叙事詩を素材に、ワグナー（Richard Wagner）が楽劇に作り上げたのがオペラ『トリスタンとイゾルデ』だった。楽劇とは従来の歌劇を総合芸術作品としてワグナーが提唱し作り上げたものである。音楽・言語・舞台の各要素が劇的内容の表現のために一つに結びつけられている。ワグナーは1854年に着想し、1857年から台本に着手し1ヶ月で完成させた。59年に作曲完了したものの、楽劇として完成し初演を迎えたのは6年後の1865年だった<sup>[23]</sup>。騎士トリスタンは、伯父マルケ王の妻となるべきイゾルデと深く愛し合っていた。この世では結ばれない運命にあると悟った二人は死の薬を飲み干すが、その薬は侍女がすり替えた愛の薬だった。そのため悲劇の愛がいよいよ深まる…<sup>[24]</sup>と解説されたワグナーのオペラは、前述の通りワグナー自身の着想による。

ワグナーが素材とした騎士道本とは異なり、流布本あるいは説話『トリスタン物語』は、ベディエ編（佐藤輝夫訳）『トリスタン・イゾルデ物語』（岩波文庫、1953年初版）でも知ることができる。「愛の秘薬を誤って飲みかわしてしまった王妃イゾルデと王の甥トリスタン。この時から二人は死に至るまでやむことのない永遠の愛に結びつけられる。ヨーロッパ中世最大のこの恋物語は、世の掟も理非分別も超越して愛し合う“情熱恋愛の神話”として人々の心に深くやきつき、西欧人の恋愛観の形成に大きく影響を与えた」<sup>[25]</sup>と解説されている。明治の文豪、夏目漱石によって『薤露行』として紹介もされた、まさにヨーロッパ中世最大の恋物語であろう<sup>[26]</sup>。

『トリスタン・イゾルデ物語』の訳者、佐藤氏の解説によれば「トリスタン伝説のケルト起源論が大きくものを言う根拠」は、「ケルト世界の若い男女を執念深く結びつけるその端緒を呪術と証兆に置くのではなく、『フィルトル』すなわち媚薬」に置いたことに意味がある、という。1985年の書かれた解説にはトリスタン伝説の象徴または紋章のようにになっている「フィルトル」の重要性が力説されている<sup>[27]</sup>。

流布本や説話『トリスタン物語』というよりもワグナーのオペラで世界的に有名になった伝説も、2005年にハリウッドで映画化され『トリスタンとイゾルデ』（Tristan & Isolde : 2005）として公開された。「ケルト伝説から生まれた有名な悲恋物語」を『グラディエーター』の鬼オリドリ・スコット監督が製作総指揮をして映画化したものである。「運命に翻弄される男女のドラマ」は「荒々しくも美しい、英国コンウォールやアイルランドの風景」が印象的な映画になっていた<sup>[28]</sup>。トリスタンは「円卓の騎士」（The Knights of the

Round Table) の一人であることは周知されている。円卓物語はアーサー王物語の別称でもあり、本稿の最終節に入っていきたい。

#### 4.3 円卓の騎士伝説と映画『キング・アーサー』

西欧世界におけるアーサー王伝説を、東洋における『三国志』に例えるのは『ケルトの水脈』の著者原氏である。物語として確立する12世紀前半から伝説や独語に翻案されて大陸の宮廷に一気に広まり、理想の騎士団像として流布した。単なる王様の武勇伝ではなく、その家臣である「円卓の騎士たち」(Arthurian) による個性豊かな伝説が個別に形成され、全体としてアーサー王物語群となったのだった。

湖の貴婦人に育てられ、アーサー王の妃グウィネヴィアと恋に落ちることで円卓の騎士団の崩壊の一因ともなる「湖の騎士ランスロット」、前節の「トリスタンの悲恋物語」、父の代から聖杯探求を続けるパーシヴァル、ランスロットの息子ガラハットによる聖杯探索物語、など円卓の騎士物語は何通りにも広がっている<sup>[29]</sup>。

アーサー王はこれらの騎士をグウィネヴィアとの婚礼の宴に迎えた。近隣諸国の高貴で勇敢な騎士を呼び集めたときに準備したのが、「円卓」だった。円卓は騎士や家臣の席がすべて平等になるように作られ、会食の際、接待は平等で誰も自分が同輩より上席にいるといった自慢をできなくした、と言われている。その円卓に座った騎士を総称して「円卓の騎士」と呼んだ。その数は、イエス・キリストの使徒と同じ数の12人とも、25人とも150人とも言われている。

「英国のプランタジネット朝は、王権基盤を強化し、またライバルでもあるフランスのカペー朝に対抗する必要に迫られていた。カール大帝(シャルルマーニュ)の子孫を自認するカペー朝に対し、プランタジネット朝は、「善王アーサーと円卓の騎士の伝説」を作り上げて対抗した。王権の権威付けという実に実用的な目的から作られたこの伝説はやがて思いがけない発展を見せてゆく」<sup>[30]</sup> という、アーサー王伝説そのものに政治的な意図があったという解釈もある。王朝を権威づけるために「神話」にも相当する「伝説」が必要だった、と言うことだろう。

アーサー王伝説で重要な要素を幾つか確認しておきたい。まず、彼の誕生の秘密である。アーサーはブリテン国王ウーゼルとイグレーヌ王妃との間に生まれた。だが魔術師マーリンの進言に従い、マーリン自身にアーサーを託し、ある騎士に預けてその家の子どもとして育てられた。だが、どの家庭に預けられたかは国王夫妻には内緒にされた。この一大事を仕切った魔術師マーリンとは何者か。夢魔を父とし人間の母から生まれ魔法を使って自分の姿を様々に変えることが出来、予言力を持つとされた。アーサー王の出生に関して術によってきっかけを作り、その後もアーサー王の守護に尽くした。彼自身は、湖の姫の侍女に恋をしたが、魔法によって大木の中に閉じこめられるという最期を遂げたのだった。

他家で育てられたアーサーが、王たる存在であることに自他共に気づくことになるのは、「巨大な石に差し込まれた剣」のエピソードだった。「この石と鉄床より、この剣を抜き出し

たる者こそ、全ブリテンの血筋正しき王たる者なり」と書かれた剣が差し込まれた巨大な石が、クリスマスの日に教会に集められた騎士たちの前に運ばれた。いかなる騎士も抜くことのできないこの剣を16歳にも満たない少年アーサーがあっさりと引き抜き、王となる資格を得たのだった。アーサー王がマーリンに連れて行かれた「妖精の宮殿の湖」で湖水の下から現れた手と腕から授かった剣が、聖剣・エクスカリバーだった。妖精の技術で作られたと言われ、どんな者も敵わない無敵の剣とされアーサー王の威厳と威力の象徴となった<sup>[31]</sup>。

ハリウッド映画では、『キング・アーサー』（King Arthur：2004）に先立つこと半世紀前、『円卓の騎士』（Knights of the Round Table：1953）が制作されている。ブロードウェイ・ミュージカルにも『キャメロット』『モンティ・パイソンと聖杯』<sup>[32]</sup> など、アーサー王伝説は芸能面において、不滅のテーマを与えているようである。

## 5. おわりに

こども学部「歴史入門」の講義を手がかりに、西洋精神の起源に関する一考察を試みた。旧約聖書・ギリシャ神話・ケルト伝説という、史実と虚構の狭間に存在する西洋精神の起源から講義を始めることは意義深いばかりか、「歴史嫌い」の学生の興味を引くことにつながった。講義では映像や音楽を用いて、視覚や聴覚を刺激し学生の「気づき」を誘導でき、歴史学習の必要性は明らかになった。

往年のハリウッドで『天地創造』や『十戒』が制作され、旧約聖書の世界が欧米社会に直結することは周知された。21世紀を迎えた現在も、『トロイ』『アレキサンダー』『キング・アーサー』等の西洋史の古典領域をテーマとする映画化は続いている。講義題材としてばかりでなく、ハリウッド映画を歴史学の視点で読み解く意義は深い。

「歴史入門」という講義を担当した初年度で経験したことを踏まえて、本稿をまとめたわけだが、西洋精神の起源に関する考察という試みは、次年度以降も、筆者には学生とともに作り出す講義の場で、多くを学ぶことになるかと確信している。

## 註

- [1] 本学勤務前年1990年以来、筆者が担当した都内の他大学での非常勤は2～4年生対象の専門科目ばかりで「西洋史各説」「米国史」「アメリカ文化史」「アメリカ文化研究」「地域研究」といった科目名で、アメリカ史を中心とした筆者の専門領域の講義ばかりであった。この点、本稿で議論の対象となる「歴史入門」とは趣を異にする。
- [2] 2007年度前期こども学部では「歴史入門」以外に「英語コミュニケーションA（こどもの文化）」も担当した。むしろこの科目が、筆者には異文化体験となった。英語科目は浦和短期大学英语科以来、現在の短期大学部英語コミュニケーション科までほぼ15年間教えてきた（学科長就任以来講義科目中心とし英語科目を担当しなくなった）。教え子たちは能力は二の次にしても、皆英語を好きな学生ばかりだった。ところがこども学部では英語を嫌う、あるいは英語基礎力がほとんど身に付いていない学生たちが受講生となった。「英語の嫌いな学生に英語を教える」というまさにカルチャーショックを経験した。一般教養の英語担当者たちには日常経験だろうが、筆者に

は新たな課題を抱えた船出となった科目だった。だが2007年度担当すべての科目の中で、もっとも成功した科目となった。英語を好きにすることは困難だが、必要な言語であり、保育職に就いた暁には、どういった場面で英語に接していくか（筆者は完全反対派ではあるが日本では幼児英語教育が花盛りで学生たちを説得しやすかった）といったシュミレーションをしながら授業を進めていったことが幸いしたようである。

- [3] 拙著『スクリーンで旅するアメリカ』（メタ・ブレン、1998年初版、2002年再版）「あとがき」 「再版によせて」 pp.220-221, 223.
- [4] こども学部で歴史入門担当が決まった段階で、筆者はメタ・ブレンとそのテキスト出版企画を始めていた。だが現実には英語コミュニケーション学科長兼務のこども学部の仕事に追われて、企画は夢幻のままで終わりそうで、本稿執筆がやっとの状態である。
- [5] 大島力『旧約聖書入門（上）』NHKラジオ「こころをよむ」（1999/4-1999/6）p.4-5, 8.
- [6] 三井不動産ワーカーズフォーラムMOC（Mitsui Open Communication）が出版する無料配布月刊誌で、毎月テーマを決めたコラムを設けている。投稿者はMOC講座で講師を務めた人たちで、筆者も2003年12月に「スクリーンで旅するニューヨーク〜クリスマス編」の講座を担当した縁で毎月ボランティアで400字投稿を続け、すでに3年目を迎えている。拙稿3回分をA4用紙1枚に切り貼りして教材にしたり、卒業生に送ったりしている。本文引用原稿がA4用紙10枚目の冒頭になるはずで、2007年10月初め締切送信したばかりの原稿の転載である。
- [7] 清水俊二「『天地創造』の日本版について」『天地創造』1976年日本公開時パンフレット
- [8] 引用部分は『投影』pp.158-160の拙稿に加筆修正したものである。筆者はすでに拙著『投影』でこの議論を行ったためである。拙著出版の元となった4年前の拙稿「スクリーンでよむエスニック・アメリカ（上）—— 宗教でよむ：ユダヤ教徒とカトリック教徒がつくったハリウッド ——」1999年1月『浦和論叢』第21号ではユダヤ民族そのものに関する議論を避け「出エジプト」のみの言及とし、映画『ファミリービジネス』を題材としたため『十戒』には触れなかった。2007年度「歴史入門」では『投影』同頁をテキストとして講義を展開した。
- [9] 松島道也『ギリシャ神話「神々の世界」篇』（河出書房新社、2001年）pp.14-23. ギリシャの神々とギリシャの英雄たちの一覧表は同書p.21を参考に筆者が取捨選択して作成した。
- [10] 同書pp.8-14.
- [11] 同書pp.26-27. (ゼウスの系譜)「重要なもののみ」の但し書き付き。
- [12] 『ぴあシネマクラブ』（ぴあ、2007年）p.707.
- [13] イタリア語で「黄金のリング」の意味を持つポモドーロはトマトのことである。以下は関係した拙稿（Dec./Jan. 2007 & 8, *MOC Columns*, 掲載予定）の転載：「美味しいものを作りたい症候群」（cf. July/Aug. 2005, *MOC Columns*）という持病を抱える私は、今月のテーマでは書きたいことがあり過ぎて絞り込むことができないため、視点を変えて、料理の材料に関して最近気になることに触れてみたい。コロンブスがインドだと疑わなかった大陸は、実は西欧人には未知の大陸だったことを確認したのはアメリゴ・ベスプッチだった。彼の名前に由来して「亜米利加」と呼ばれた大陸から運ばれた代表的な二つの野菜が、ジャガイモとトマトだった。前者は1539年に南米からスペインに持ち帰られ、後者はメキシコからスペイン経由でイタリア（ナポリ）へ入ってきた。伝来当初、前者は貧者の食べ物、後者は観賞用や薬用だったらしい。ジャガイモは仏語で「ポム・ドゥ・テール」（大地のリング）と呼ばれ、トマトは伊語で「ポモドーロ」（黄金のリング）、命名基準はともに「リング」らしい。カトリック文化圏におけるリングは、アダムとイブがエデンの園から追放された原因とされる知恵の実にも通じる。「原罪」に通じる「リング」の意味を考えつつアップルパイを焼くでしょう。

- [14] 『朝日新聞』2007年4月28日（土）夕刊「腕試し検定【歴史能力・3級世界史】古代ギリシャについて述べた次の文章を読み、あとの問いに答えなさい」
- [15] *Asahi Weekly*, Sunday, June 10, 2007, p.20.
- [16] *Ibid.*
- [17] 森谷公俊『アレクサンドロスの征服と神話』興亡の世界史第1巻（講談社、2007年）p.206.
- [18] 『朝日新聞』2007年4月28日（土）夕刊全面広告A～D「先住民マオリの祈りの大地 MAORI CULTURE」以下は「誰も知らないニュージーランド」と題された宣伝文である。「ジェームズ・クックが上陸するよりはるか以前、ポリネシアから海をわたってやってきた先住民マオリは、この地で豊かな文化を花開かせていた。彼らは文字をもたないかわりに歌や踊りで感情を表現し、さまざまな神話でこの国を彩ってきた。いまでは純血のマオリはほとんどいないといわれるが、それでも彼らの文化はこの国に深く根付いている」
- [19] 『投影』pp.58-60に詳しい。
- [20] 原聖『ケルトの水脈』興亡の世界史第7巻（講談社、2007年）pp.14-15.
- [21] 同書pp.19-22, 24-25.
- [22] 同書pp.40-41.
- [23] 永竹由幸『痛快！オペラ学』（集英社、2001年）pp.160-161.
- [24] 山田治生編著『オペラガイド126選』（成美堂、2000年）pp.98-101.
- [25] ベディエ編（佐藤輝夫訳）『トリスタン・イゾー物語』（岩波文庫、1953年初版）表紙
- [26] 夏目漱石『倫敦塔・幻影の盾』（新潮文庫、1952年初版）→『薙露行』収録
- [27] ベディエ編前掲書、佐藤輝夫「解説」pp.287-303.
- [28] 『ぴあシネマクラブ』（ぴあ、2007年）p.704.
- [29] 原聖、前掲書p.262.
- [30] アンヌ・ベルトウロ（松村剛監修、村上伸子訳）『アーサー王伝説』*Arthur et la Table ronde* 「知の再発見」双書71（創元社、1997年）p.35.
- [31] 「アーサー王伝説を知るためのキーワード」映画『キング・アーサー』パンフレット
- [32] 「アーサー王物語の映画化」ベルトウロ前掲書pp.162-167

## 【こども学部「歴史入門」2007年度前期講義シラバス】

## [授業のねらい・到達目標]

過去を知することは現在を考える上で欠かせないことであると同時に、将来への展望を描く上にも欠かすことはできない。「歴史に学ぶ」ことを怠ると、現在に迷い将来に憂うことになりかねない。真摯な気持ちで歴史に向き合いたい。とかく「暗記物」と敬遠されがちな歴史だが、映画を通して考えることにより受講生にとって身近な問題として取り組ませたい。

## [授業の概要]

歴史を学ぶとは「暗記する」ことではなく「考える」ことである。21世紀を迎えた地球の現状（環境問題、民族や宗教紛争、貧困問題など）を見る上で原因究明や解決方法模索のためには歴史を学ぶ必要がある。戦争の世紀といわれた20世紀から、平和を志向した21世紀に入ったにも拘わらず起こった「9月11日」以来、合衆国ばかりか世界が変わったと言われる。世界の歴史を考える上で、アメリカ史を通して歴史を学んでいく。「9月11日以降の世界を考える」を主たる目的として、20世紀以来残されたドキュメンタリーを含み、事実に基づいたアメリカ映画や身近な音楽を用いて視聴覚にも訴えながら講義を進める。

## [授業計画（各回のテーマ・内容）]

1. 講義内容紹介：時事ニュースから始める歴史学習  
→2007年春のニュースを読む・学生への時事問題で講義開始
  2. 旧約聖書から読み解く中東和平：映画『プリンス・オブ・エジプト』
  3. ギリシャ神話から知る西洋：映画『トロイ』
  4. 西洋と東洋の出会いから生まれたヘレニズム文化：映画『アレキサンダー』
  5. 十字軍が聖地から持ち帰ったものは…：映画『ダ・ヴィンチ・コード』
  6. ケルト民族の誇り、アーサー王伝説：映画『キング・アーサー』
  7. 大航海時代の始まり、アメリカ大陸への進出：映画『1492・コロンブス』
  8. アメリカ先住民の悲劇の始まり：映画『ポカホンタス』と『ニューワールド』
  9. アメリカ黒人奴隷貿易の実態：映画『アミスタッド』
  10. 南北戦争での逃亡奴隷と西方先住民：映画『グローリー』と『ダンス・ウィズ・ウルブス』
  11. 移民たちの夢「土地獲得レース」：映画『遙かなる大地へ』
  12. ハリウッドが描くマッカーシズム：映画『真実の瞬間』
  13. 「9月11日」以降の世界を考える：映画『ワールド・トレード・センター』
  14. 日米関係を真珠湾攻撃と原爆投下から考える：原爆関連のドキュメンタリー映像  
→前期科目となったために、従来続けてきた筆者の講義方法通り前期最終講義は「原爆製造計画／ヒロシマ・ナガサキ／核廃絶問題／日米関係」をテーマとすることにして、後期科目となった場合の真珠湾攻撃の教材『パール・ハーバー』は後期の「アメリカの生活と文化」に取り込むことにした。
  15. 最終試験（手書きノートのみ参照）
- [テキスト] 岩本裕子『スクリーンに投影されるアメリカ』（メタ・ブレン、2003年）

## 【本稿章別：関連映像・参考文献一覧】

## 2. 旧約聖書から読み解くヘブライズム

[関連映像] 欧文は原題。制作国名明記以外は米映画。

1. 天地創造（The Bible...In the Beginning：1966）

2. 歴史としての聖書 (Und Die Bibel Hat Doch Recht : 1977・西独)
3. 偉大な生涯の物語 (The Greatest Story Ever Told : 1965)
4. サムソンとデリラ (Samson and Delilah : 1949)
5. バベル (Babel : 2006)
6. 十誡 (The Ten Commandments : 1923)
7. 十戒 (The Ten Commandments : 1956)
8. プリンス・オブ・エジプト (The Prince of Egypt : 1998)
9. パッション (The Passion of the Christ : 2004・米＝伊)

[参考文献]

1. 関連映像リスト各パンフレット (劇場販売用)
2. 伊藤弘成『シネマウォーク インワールドヒストリー I (改訂新版)』(山川出版、2006年)
3. 服部弘一郎編『シネマの宗教美学』(フィルムアート社、2003年)
4. ミレーユ・アダス・ルベル (矢島文夫監修、藤丘樹実訳)『旧約聖書の世界 ― 神とヘブライ人の物語』『知の再発見』双書78 (創元社、1998年)

### 3. ギリシャ神話から知る西洋：神々と共存するヘレニズム世界

[関連映像] 欧文は原題。制作国名明記以外は米映画。

1. トロイのヘレン (Helen of Troy : 1955)
2. トロイアの女 (The Trojan Women : 1971)
3. トロイ (Troy : 2004)
4. 300 (Three Hundred : 2007)
5. アレキサンダー (Alexander : 2004)

[参考文献]

1. 関連映像リスト各パンフレット (劇場販売用)
2. 松島道也『ギリシャ神話 [神々の世界] 篇』(河出書房新社、2001年)
3. 松島道也『ギリシャ神話 [英雄たちの世界] 篇』(河出書房新社、2002年)
4. ピエール・ブリアン (桜井万里子監修、福田素子訳)『アレクサンダー大王 ― 未完の世界帝国』『知の再発見』双書11 (創元社、1991年)
5. 森谷公俊『アレクサンドロスの征服と神話』興亡の世界史第1巻 (講談社、2007年)
6. 桜井万里子『ヘロドトスとトゥキュディデス ― 歴史学の始まり』(山川出版、2006年)

### 4. ケルト民族の誇り、アーサー王伝説

[関連映像] 欧文は原題。制作国名明記以外は米映画。

1. 円卓の騎士 (Knights of the Round Table : 1953)
2. キャメロット (Camelot : 1967・仏)
3. 湖のランスロ (Lancelot du Lac : 1974・仏)
4. モンティ・パイソンと聖杯 (Monty Python and the Holy Grail : 1975)
5. ペルスヴァル・ル・ガロワ (Perceval Le Gallois : 1978・仏)
6. エクスカリバー (Excalibur : 1981)
7. キング・アーサー (King Arthur : 2004)
8. トリスタンとイゾルデ (Tristan & Isolde : 2005)

## [参考文献]

1. 関連映像リスト各パンフレット（劇場販売用）
2. 上野格編『図説 アイルランド』（河出書房新社、1999年）
3. アンヌ・ベルトウロ（松村剛監修、村上伸子訳）『アーサー王伝説』Arthur et la Table ronde「知の再発見」双書71（創元社、1997年）
4. 原聖『ケルトの水脈』興亡の世界史第7巻（講談社、2007年）
5. 夏目漱石『倫敦塔・幻影の盾』（新潮文庫、1952年初版）→『薙露行』収録
6. ベディエ編（佐藤輝夫訳）『トリスタン・イゾー物語』（岩波文庫、1953年初版）

## Summary

## A Study on the Origins of Western Mind

— Bible, Mythology, Legends through Hollywood Movies —

Hiroko Iwamoto

With the inauguration of the faculty of Child Studies at Urawa University, I began to teach “Introduction to historical science” (REKISHI NYUMON in Japanese) as one of the starting staffs. This class (lecture) is one of cultural studies and elective subject, not required subject.

Most of the Japanese students are tend to dislike “history” and try to avoid studying history. One of the purposes of my lectures is to give my all students “noticing” (“KIZUKI” in Japanese). Noticing is the starting point of studying all. I want to notice my students that studying history is important to understand the international relationship and human relationship, also.

The purpose of this paper is to bring my idea into focus about the fruits of REKISHI NYUMON. It will be “A Study on the Origins of Western Mind.” The keywords of this paper are as follows : Bible (Old Testament) to Hebraism, Greek Mythology to Hellenism, Celtic Legends, Western History, Hollywood Movies and so on.

**Keywords** Hollywood Movies, Western History, Hebraism, Hellenism, Celtic Legends